令和２年度　学校だより２月号　　今年度目標“ ホンモノを目指さないか？”

こやのせだより

「ホンモノとはなにか？」
「キミはホンモノか？」
「木屋瀬小はホンモノか？」

令和３年２月２日
北九州市立木屋瀬小学校
校長　渕　上　正　彦

コロナに負けず新しい学校づくりを目指します

２月となりました。遅くなりましたが、今年初めての学校だよりとなりますので、今年の抱負をお話しします。

今年は丑年です。丑年は、先を急がず一歩一歩着実に物事を進める年と言われています。そこで、今年は、

①大切なことを見極めます。⇒❶コロナウイルス感染対策を怠らず行います。❷今この時期に児童にとって大切なことを逃さず進めます。

②一歩一歩着実に進めます。⇒❶ホームページでの発信、メール等で保護者への周知に努めます。❷新たな時代の到来と受け止め、学校の新たな方向性を示します。

③チーム木屋瀬でつなげます。⇒❶児童、職員、保護者、地域皆で子どもの明るい未来を創ります。❷チャレンジ精神をもち、失敗を恐れず皆で進めます。

緊急事態宣言の中、休校とならず毎日元気な子どもたちと学校生活が送れることに感謝しています。保護者の皆様の健康管理、コロナ対策への対応のおかげです。ありがとうございます。

今年も、皆様の力をお貸しください。今年１年どうぞよろしくお願いいたします。

○令和２年度の今後と令和３年度の予定

●令和２年度

２月 26 日(金)６年生を送る会
３月１７日(水)卒業式
３月 24 日(水)令和２年度修了式

※持久走大会は、マスクせずに大勢が近距離で走るため、感染防止ができないと考え中止しました。ご理解下さい。
※送る会は、体育館ステージに６年生にいてもらい、入れ替わりながら学年別に１０分程度最後の交流をします。
※卒業式は、５年生児童は会場に入っての参列はしません。

●令和３年度

４月　７日(水)１学期始業式
４月１２日(月)入学式
７月 20 日(火)１学期終業式
８月２６日(木)２学期始業式
１２月２３日(木)２学期終業式
１月１１日(火)３学期始業式
３月２４日(木)令和３年度修了式

※感染状況によっては変更することがあります。

○令和３年度の木屋瀬小学校
新しい時代の新しい学校を創造する

ニューノーマルの時代です。学校も新しいあり方を見出すときです。今年度一年間のコロナと学校のお付き合いを振り返り、新たに見えてきたこと、改善すべき点を総括して、SDGｓの視点で新しい学校づくりに挑みます。

●すべての子どもが生き生きと輝く行事を開発。
●練習や準備に時間を奪われず、子どもと教師が向き合う時間を保証する構成。
●子どもと教師が１年間を見通したストーリーをもち、学年一体で計画的に歩む主体的な学校生活。
●落ち着いて学習ができ、一人一人が自分の成長を感じることができる学校生活。

※運動会は全面的にスタイルを見直し秋に行います。
※学習発表会は、年間を通した日常の学習内容に視点を当てて学年ごとに日を変えて２月に行います。
※詳細は来年度お知らせします。

2/4（木）18：30～19：00　NHK ニュースに木屋瀬小学校が出ます。

シリーズ 子育て応援 ～校長の独り言

頂点を極めた人々に共通する「規則性」

Forbes JAPAN　藤吉雅春より　(WEB より)

親が子供に４つのしつけを教えたかどうかで、将来、日本では年収に 86 万円の差が生まれる。そんな研究が発表されています。子供の将来を見据えてどのような教育が必要なのでしょうか。

「アメリカの一部の教育機関では、学力とあわせて非認知能力の通知表が存在します」教育経済学者の中室牧子は自称評論家のもっともらしい俗説より、大量のデータから観察される規則性を重視すべきだと説く。では、非認知能力とは何か。

「ダックワース准教授が GRIT（グリット）と呼ぶのは、“やり抜く力”です。遠いゴールに向かって、興味を失わず、努力し続ける力です。ダックワース准教授らの研究によって、状況によらず、やり抜く力が強いことが成功の鍵となることが明らかになっています」

非認知能力はどのようにして高めることができるか。まず、子供の褒め方を例にとろう。「『頭がいいのね』と、もとから持つ能力を褒めると、子供は意欲を失い、成績が低下することがコロンビア大学のミューラー教授らの実験によって明らかにされています。」

「それよりも、『よく頑張ったね』と努力の中身を褒められた子供は、成果は努力によって決まっているのだと考えるため、より難しい課題に粘り強く挑戦しようとする傾向がみられたそうです」

また、中室はこう言う。「締め切りを意識して計画的に宿題を終えたり、授業中に積極的に発言したり、先生や同級生との良好な関係を築いたりするといった非認知能力を在学中にきちんと獲得した高校生は、高校を卒業後も成功していることがアメリカの大規模な調査の中で明らかになっています。どんなに勉強ができても、自己管理ができず、やる気がなく、コミュニケーション能力が低い人が社会で活躍できるはずがありません。」

中室によると、こうした非認知能力は、家庭や学校での教育によって鍛えられるものであり、将来の年収、健康や幸福感など多岐にわたる効果を発揮するという。

また、神戸大学の西村和雄教授らの研究では、**４つの基本的なしつけ（嘘をついてはいけない、他人に親切にする、ルールを守る、勉強をする）**を親から教わった人は、それらをまったく教わらなかった人と比較すると、年収が 86 万円高いことが明らかになっている。勤勉性という非認知能力を培うのに重要なのが、親のしつけなのだ。

「目の前の定期試験で数点を上げるために、部活や生徒会、社会貢献活動をやめさせたりすることは慎重であるべきかもしれません。長い目でみて子供たちを助けてくれるであろう非認知能力を培う貴重な機会を奪うことになりかねないからです」

中室は「日本でもデータに基づくエビデンスを教育政策に反映させるべき」と言う。どんな教育が子供の人生を豊かにするのか。その問いに改めて向き合わなければならないのは大人のほうかもしれない。